

佐賀コミュニティ「カメレオンと賢人」



1.はじめに

(1)コミュニケーションと働く場

祖父が旅行に行く祖母に「いいなあ、お前は」と言っていた。祖父は元気に農業を営んでいるが、呼吸器に障害があり、遠出ができない。唯一楽しみなのは、道の駅に農産物を出荷するときの同業者とおしゃべりをする時間だそうだ。その話から、佐賀ではなかなか新しい場所に居場所を作れないことや、人と話すことが重要だということを心底感じた。

また、道の駅に学習施設を組み合わせるなど、働く場にコミュニティスペースの付加価値をつければ、“ふれあいの場”と成りえるのではないだろうかと考えた。

2.提案

そこで私が提案するのは、小さな働く場と一体となった、次なる**佐賀の賢人**となるべき人が育まれる、且つ、利用者によってカメレオンのように形態を変化させる、コミュニティ施設・スペースである。この場所は、中心市街地の商店街につくることとする。

佐賀には偉大な**12**人の賢人がいた。しかし、佐賀は観光名所も名物も少なく、**12**賢人の名前も歴史もあまり知られていないのではないか。佐賀には何もない、と言われることも多く、また、佐賀人にとってもそのように感じることは、非常に悲しいことである。

なぜ知名度が低いのか考えてみたところ、①彼らは、学問、政治、医学、外交など理論的な能力に秀でていたため、功績が形として残っていないことや、②他の土地で功績をあげていること、また、②銅像などが身近になく、親しみがないことなどが考えられる。

何もない佐賀といわれるのは、頭脳で勝負してきた先祖たちだからこそではないか。と、いうことは佐賀で育ってきた**12**賢人のDNAは現代にも受け継がれているのではないだろうか。

現代に生きる佐賀人たちは、彼らが動かした歴史をしっかりと知り、新たな未来を想像していかなければならないのではないか。

以上より、**12**賢人に触れ、佐賀にふれ、人に触れ合える施設を考えた。



▲12賢人のパンフレット

資料：佐賀市経済部観光振興

(1)12 賢人

①銅像

鹿児島に行くと、私は必ず「若き薩摩の群像」に目が止まる。凛々しく駅前立つあの姿は、鹿児島の人が、いかに偉人を親しみ、敬っているかが感じ取れる。このため、このスペースには **12 賢人の「銅像」** を入口にかっこよく配置する。



▲若き薩摩の群像

資料：鹿児島市

②12 賢人の空間

また、**12 賢人**にまつわる空間を創る。例えば、以下のような空間が考えられる。

【徐福】

広大な佐賀平野に水田を広げ、工業、医学、天文学など様々な

ハイテク技術を持ち込んだ ⇒ **農園**

【成富兵庫茂安】

茂安が各地に作った水利システムによって水争いや百姓一揆が起こらなかった ⇒ **池**

【高遊外売茶翁】

煎茶道の祖 ⇒ **キッチン×お茶スペース**

【鍋島直正】

技術立国日本の礎を築き、鍋島焼きの生産にも力を入れた

⇒ **鍋島焼きを壁・床に使用**

【枝吉神陽】

佐賀の吉田松陰と言われた佐賀藩の教育者 ⇒ **本棚**

【島義勇】

札幌を、京都の都市計画を参考に碁盤目のように都市設計し、基礎づくりをおこなった。

⇒**碁盤目上のスペース利用**

【佐野常民】

日本赤十字社の創始者、三重津海軍所の監督 ⇒ **三重津海軍所の船の模型を池に。**

【副島種臣】

近代書の先駆者、書道デザイナー ⇒ **書道スペース**

【大木喬任】

教育制度の基礎を作り上げた酒豪 ⇒ **酒を飲むスペース**

【江藤新平】

初代司法卿 ⇒ **法律の象徴である天秤**

【相良知安】

ドイツ医学導入の功績者 ⇒ **ハーブ畑**

【大隈重信】

政治家であり、早稲田大学の創設者

⇒ 母が作った、勉強中頭をぶつけて眠気を覚ましたという柱

(2)変化するコミュニティスペース

このスペースは、時間や、利用者とともに変化する。

①時間変化

まず、働く場として、いくつかの団体と契約することで、必ず人がいるスペースにする。一例を以下に示す。

【朝】農産物などを売る、いち。

ここでは高齢者が主体となる。農産物直売所で、自分の農産物を売りながら、お茶スペースを利用して、それぞれの近況を話したり、農産物を売りに出した後、学習室で生涯学習を学んだりする。



【昼】お母さん達のためのカフェ

この時間は、お母さんたちが集まってお茶をする。カフェ経営者を雇ったり、お母さんたち団体が交代でオーナーになり、農家のおじいちゃん、おばあちゃんが持ってきてくれた売り物にならない野菜たちを使って、ちょっとしたおやつをつまみながら、お話をする。



【夕】生涯学習・学習室

子どもたちが学校帰りに、書道教室などの生涯学習や自学をする場所となる。お母さんたちが作っていたおやつを食べながら、もうひと頑張り。



【夜】bar

夜は、大学生や会社員などがお酒を飲みながら飲みニケーションをとる場となる。若手の **bar** 経営を学びたい人に安く店を開かせる。



②利用者変化

また、施設として、碁盤目に区切られたスペースに、御簾のようなロールカーテンを設ける。このロールカーテンは人数によって区切るスペースを変更でき、それによって椅子やテーブルも変更することができる。また、ロールカーテンは、色がいくつかに分かれており、パブリック空間、グループ空間、プライベート空間を他人にひと目でわかるようにすることで、空間を区切ってはいるものの、御簾のような素材であるから、完全には「人」をシャットアウトしないづくりとなる。

(3)進化するコミュニティスペース

このスペースは、利用していくうちに、変化して行く仕掛け作りが必要である。

例えば、

【1年目】

- ・おじいちゃん、おばあちゃんにはサポーターがつくなど高齢者優先の空間になる。
- ・おじいちゃんたちと子どもたちが一緒に生涯学習を学ぶなど、利用者同士の関係が深まる。

【2年目】

- ・利用者が商売をはじめると、利益を生み出す。

【3年目】

- ・周囲を巻き込んだイベントをはじめると、活性化の動きがはじまる。

3.おわりに

盛り沢山な内容になってしまったが、12賢人のうち、9賢人は同じ時代に生まれ、ともに学び、たたえ合って、偉大な功績を残している。このようなスペースができ、12賢人にあやかって、もっと自由に、人と出会ったり話ができる空間があれば、佐賀が何もないわけではないと思える空間に育ってほしい。



▲佐賀の12賢人から抜粋された、幕末・維新佐賀の八賢人おもてなし隊

資料：<http://sagahachikenjin.sagafan.jp/e502529.html>